
告白は激闘だ2

にーとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白は激闘だ2

【Nコード】

N4252J

【作者名】

にーとん

【あらすじ】

告白する人、される人。いつもその傍らにいるような、仲人が主人公の物語。

おさらい

どうも、作者ことにーとんです。

お久しぶりです。長らく小説を投稿していませんでした。
すいません…。

さて、これは『告白は激闘だ2』です。

激闘、の代わりに劇場、だとか惨状、だとか戦場、だとかにしようと思っただけやめました。

うん、ネーミングセンスねえな俺…。

で、まあ『告白は激闘だ』を読んで下さった方はともかく、全く知らない方もいるはずです。

本当なら「『告白は激闘だ』の方も読んで下さいねー」とか書きたいところなんですが、なにせ読み返したらひどいっただら…。

でもまあ、ギャグ要素としては面白いところもあると思うけど…

…俺だけか？

そんな感じなので、だいたいの前回のストーリーを『おさらい』として綴りたいと思います。

前回読んでる人も忘れてるかもだし…。

めんどかつたらどうぞ飛ばして下さいな。…いや、読んだ方が良いかも。

それではおさらいを始めます。

主人公、白石秋斗は春に産まれたのに秋斗。

いや、そんなことはどうでも良くて、彼は人と人を取り持つ、『仲人』として校内に知られておりました。

そんな秋斗君に鳥肌たつぞう、あらため鳥原たつぞう君は「俺と神野ちゃんを、カップル、もしくはそれ以上のいやーんな関係やあつはんうつふんな関係にしてくれ！頼む神様！！」と頼み込みました。

その頼みを秋斗君は相当じらしてから（彼に言わせれば快く）承りました。

秋斗君は仲の良い後輩関野さんに、神野さんに『鳥原君をどう思ってるのか』聞いてもらいます。

そしてその腕前を見込んだ秋斗君は関野さんを子分にするのです。秋斗君は神野さんに鳥原君の『おつとこまえ！』などところを見せようと、夏祭りの日に妹、白石凜とともに神野さんを誘拐し、鳥原君が助ける、という筋書きを用意したのですが、神野さんの思わぬ強さに困惑してしまい、失敗に終わりました。

その力は彼女の『多重人格』によるものであると、秋斗君は推測します。

後日、凜の計らいにより天ぷらパーティが開催されます。

そしてその時、秋斗君は神野さんに『鳥原君と付き合いたい』ということを知らされます。

それを秋斗君は鳥原君に知らせます。これで任務終了だ、と秋斗君は安堵しますが現実はその甘くありませんでした。

後日、学校に行くと秋斗君は鳥原君に怒鳴られます。

曰く、「告白してもフられた」と。

なぜだろう、と秋斗君が考えたところ、理由はやはり彼女の『多重人格』であるという結論に達しました。

その後、秋斗君と鳥原君は神野さんの全ての人格に鳥原君を好きにさせるため努力します。

そして最後の人格になった時、『笹川君が神野さんと付き合っている』という噂を関野さんは耳にし、秋斗君に知らせます。

不安になった秋斗君は確かめるため、笹川君にことの真偽を聞きます。

それはやはり、ただの噂でしかありませんでした。

しかし、笹川君は神野さんのことが気になっているようで、彼女について秋斗君から聞きます。

『多重人格』である、ということを知った笹川君は「じゃあ良い

や」と言つのです。

その言葉に対して秋斗君は怒りました。

そしてその翌日。

秋斗君が朝起きると凜の姿がありませんでした。

そして、テーブルの上に二枚の手紙。

凜からの物と笹川君の物でした。

関野さんが、攫われたそうです。

そしてその犯人は笹川君。

秋斗君は鳥原君、神野さん、凜と共に関野さんを助けにいきます。

そこで、鳥原君の活躍により笹川君をあつさり撃破。

関野さんを助け出します。

鳥原君のその活躍に、最後の人格の神野さんが惚れ、告白し、彼らは付き合い始めます。

ちゃんちゃん。

さて。

今回秋斗君はどのように活躍し、誰と誰をカップルにするのでしょうか。

それは俺にも分からない（おい

おさらい（後書き）

ただら更新ですが最後までお付き合いいただけたらな、と思います。

よろしく願います。

第一話　くお泊まり会編

「つまりは、こういうことですね。この学校に、転校生がやってくる、と」

「つまり、っていうかそのまんまです」

「で？」

「いや、だから、転校生と言えばとっても美人で皆の気を引きまくり！　そしてそうすれば私たちへの依頼も増えるのではないかと」
「ほう」

なかなか…成長しましたね…関野さん。

そして僕は白石秋斗です。お久しぶりですなあ…。

僕たちが出会ったのはそう、あの終戦の時あの地で…

「聞いてますー？」

「はっ！？　聞いてますよ？　聞いてます！」

「何狼狽してんですか」

「うわあデジャヴだー」

前にもこんなやりとりがあったような…。

「聞いてなかったようなのでもう一度言います。先生に聞き込みをしたところ、転校生はお約束な感じで美少女だそうです。」

「なるほど」

確かにこれはくる気がしますね。

そろそろ報酬とかとつても良いんじゃないでしょうか…。

そうすればがっばがっば…うふふ………。

「秋斗さん…何一人で笑ってるんですか」

「いや、元よりこういう顔なんです」

「えええ！？　じゃああれですか！？　今までの顔の方が作っていた顔！？」

「表情筋の病気なんです」

「ひいひい！？　秋斗さんの顔がよりマイルドな笑顔に！？」

「じゃ、そういうことで」

キリッ。顔を元に戻します。

「秋斗さん……なんか違う人の顔になってます」

「……………誰の顔だか当ててごらんなさい」

「ペリーだ！ ペリーの顔だよ！ 開国を迫ってくる！！」

「どんな顔だかこつちが知りたいです！」

うーん、そんな顔になっていたんですか僕は。

しかし……関野さんとの会話は正直疲れます。

「はあ……………。このまま関野さんルートに入ってしまうのでしょうか」

「まあ、フラグは充分に立ってると思いますがね」

「……うーむ……………。回避するにはそうすれば良いんだろう」

「いやいやいや！？ 自分でフラグ立てといてルート回避するとか何がしたいんですか！？ どっちつかずだと誰の好感度も上がらないからバッドエンドになりますよ！？」

「……………それが僕の、トゥルーエンド」

「かつこいいい！？」

「孤独に生きる僕に相応しい、おわり終焉」

「なんか中二くさい！」

「くつ、また暴れ出しやがった！ おさまれ僕の右手！！」

「完全に中二ですよそれ！」

「疲れるけど楽しいですね……」

ネタが通じるこの楽しさ。

「……さて。そろそろ僕は帰りますよ」

「……………ここ、秋斗さんの家ですけど」

……………。そういえば今まで流してたけどなんで関野さんは僕のことを下の名前で呼んでるのでしょうか」

.....秋斗さんが良いって言ったんですよ!？」

「な、馴れ馴れしいですよ!？」

「いやだから本人の承諾を得てるんですけど!」

「そうでしたっけ」

「ほけてきましたね」

なっ!？」

この子はなんて失礼なことを言うのでしょうか!

「そんなこと言うとなたに覚醒めますよ?」

「秋斗さんはルビを使いすぎです」

「.....まあ夜も遅いんで泊まっていきなさい」

「え!？」

「うん。それが良いです。この時間に外を出歩くのは関野さんとは
いえ危ないです」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあもうちょっと話しますか」

「.....うーん。なんか僕、この子に甘くなってるような気がします

...。

第一話。くお泊まり会編（後書き）

いやあ、プロローグ的なだけ更新ってのもどうかと思うんで一話を更新します。

こっからは本当に更新遅くなるかもです。

なぜか長くなっちゃったけど次話からは短いんだからね！

そこんところ勘違いしないでよね！！／／／

ごめんなさい

第二話。くお泊まり会編

まあそんな感じで楽しく話してます。白石秋斗でござんす。
と、そこに。

「お風呂にする？ ご飯にする？ それとも私？」

「凜…。客がいるのによくそんな冗談を言えますね」

「いや、私の家だし」

「そうだよー、メイドちゃんも別に私に対してきばんないで良いんだよー」

「気張るって何か使い方が間違ってる気がするのですが僕だけ？」

「今のきばんないで、は気張る、じゃなくて黄ばむ、の方だぞ兄貴」

「うちの妹が関野さんの前では大変なことに！？ いや…。日本人は肌の色が黄色だからもともと黄ばんでるのでしょうか…」

また謎が増えてしまいました…。

「あー！ そういえば私パジャマ持ってきてないー」

「かわいい…」

二つめの台詞は凜のですよ。一応言っておきますが。

「な、何がかわいいのかなメイドちゃん」

「ぱ、パジャマ…。寝巻き、ではなくパジャマだぞこのときめきが分かるか兄貴！！」

「ゆーれーるー」

肩を揺らさないでください。

「あ、すまない兄貴。なんだか興奮してしまった」

「……凜はいつからブラコンからレスに転職したんですか」

「やめてくれ！！ どっちも黒歴史になりそうだから！！ 私はノーマルだから！！」

「そうですよ秋斗さん。メイドちゃんはレスじゃなくて百合なんですよー」

なんというか…。どちらにせよ関野さんが危ないんですけどね…。

「で、話を戻しますけど」

「なんでしたっけ…僕の相応しい終焉^{トウルエンデ}についてでしたっけ？」

「違います！！ パジャマが無いんですけどどうしましょうという話です！」

「く…かわいい…」

「そうですね…。凜のじゃ小さいですか？ 取りに行く、じゃ意味ないし」

「そういえば親に連絡しなきゃ…。電話借りていいですか」

「どうぞー。レンタル料取りますけど」

「……まあいいや」

関野さんがどんどん横着になつてるような気が…。

「あー、もしもし？ 私私、私だけどさー」

「私私詐欺だぞ兄貴…」

「しっ！ 人が電話してるときは黙って盗み聞きするんです！」

「……………」

「関野さんが黙っちゃったぞ兄貴！」

「しっ！ 人が電話してるときは黙って盗み聞きするんです！」

「あー、うん。それでさー、今日はメ…凜ちゃんっていうお友達の家にお泊まりするんだけど良いかなー？」

「スルーだぞ兄貴！ しかも私のことをメイドちゃんって言いそうになった！」

「…ふむ。僕ではなく凜の名前を使うことによって親を安心させるという戦法ですか…」

なかなか頭が切れるようになりましたね…。

「うん。そう。うん。え？うん、いるよ？ でも大丈夫。秋斗さんは私がこれと決めた人だから！」

「なんだかおかしくないか？」

「い、いや……………だ、大丈夫ですよ」

「え？ 何？ 電話を替われ？ 無理無理、今秋斗さんお風呂入ってるもん。……………いやー、いくらなんでも一緒にお風呂は早すぎ

るでしょー！ あはははは！」

「何の話をしてるんだ！ 何の話をしてるんだうがああ！」

「落ち着いて凜！ 深呼吸をー！」

「すー！ー！ー！ー！！！！ はあああああああああああ
！！」

「それはもはや深呼吸じゃないですよ！」

「あれ関野さんの突っ込みだ」

「電話は終わったんですか？」

「秋斗さん達が騒ぎ出すから切ったんですよ、電波が悪くなったふりして」

家の電話でそれは無理があります！

第二話。くお泊まり会編（後書き）

こんなに更新遅くなるつもりは…w

修正しましたく（自己紹介文）

第三話。くお泊まり会編

「…で！ パジャマどうすれば良いんでしょうか！」

「そのまま寝れば良いじゃないですか…」

「嫌ですよ！」

「じゃあ裸で」

「……………」

「冗談ですよ？」

上目遣いで見つめてくる関野さん…。

どうも、白石秋斗でござんす。

「私…秋斗さんにならって…おもっ！それ以上は言わせんぞ関野さん」

「うわあああせつかくのシチュエーションがメイドちゃんに邪魔されたよう！」

「危なかったです…」

それはもう色んな意味で…。

「私の前でそういう行為に及んだら写真を撮ってネットにアップする」

「それはやめてメイドちゃん！」

「関野さんはそういうのが興奮するんじゃないんですか？」

「秋斗さんまで！」

「そしてその内、金を出させて関野さんを…という寸法なんだが」

「という寸法なんだが、じゃないです！ 秋斗さんなんとか言うてください！」

「お金は…欲しいです…」

「もうやだ！！」

仕切り直し。

「で！ パジャマどうするんですか…！」

「凜のを借りれば良いと思います」

「うむ。それで良いだろう」

「無理です！ メイドちゃんはまだ小学生！！ 私は中学生！」

「……そうだったんだ」

「なんで驚いてるのメイドちゃん！」

「てつきり園児かと」

「おかしいね！ 明らかにおかしいねそれは！」

「てつきり作者の趣味かと」

「そこら辺は言っちゃいけないね！ 明らかに言っちゃいけないね
！！」

「なんだかテンションが高いですね二人……」

「じゃあ帰れ、というわけにもいかない時間だしな……」

「ぼそつと凧が呟きました。」

「メイドちゃん私に敵意をもってない？」

「そそそそそそんなことないっすよ！？」

「キャラが変わってる！」

「ていうかパジャマの話題だけで喋りすぎです……」

「確かにそうだな……。よし、私のを着せよう」

「やっぱりそうなるんだ……」

「着替えるから兄貴は入ってきたら駄目だぞ」

「私……秋斗さんにならって……おもっ！ さあ行くぞ関野さん」

「いやあああああ服があ！ 服が伸びるよメイドちゃん！ 引つ
張らないで！」

「うるさい人だなあ……」

「まあとりあえず嵐は去った感じですね。」

しばらくたってから関野さんはリビングに戻ってきました。

「秋斗さん……どうですか……」

「なっ………んてことないですね」

「危なかったです……それはもう色んな意味で。」

凧のパジャマは関野さんには少し大きくてその普段は隠れていた

意外と大きなm…あれ？

「はっはっは！ さあ関野さん！ 『貧乳はステート』うるさいよ
う！」

「邪魔された…」

不服そうな凜としかめっ面な関野さん。

「私だって秋斗さんにもんでもらえb「おっと危ない！」」

「邪魔された…」

不服そうな関野さん。

く…しかしかわいい…。

詳細な描写は次回で！！ です。

第三話。くお泊まり会編（後書き）

みんなばんばんコメしてくれて構わないんだからね！！
ていうかしてください…。

第四話。くお泊まり会編

ボタンは二番目から上はあけてあり、彼女の鎖骨がちらりと見える。

風呂に入ってきたらしく、髪しつとりと濡れていて頬が少し上気していた。

こんばんは、白石秋斗です。

最近お酢をそのまま飲むのはまっています。嘘です。

「兄貴…。今見とれていたな」

「はっ！？ そんなことはなかとですだ！」

「どこの人ですかそれ」

知らんとですだ！

「さて、私たちはもう寝るぞ」

「えー、私は秋斗さんといっ sh「さあこっちだ関野さん」

「うわあ服が伸びるう」

「……………」

ふう。やつとうるさくなくなりました。

しかし…転校生ですか…。気になりますね…。

「もう！ 凜ちゃんってば！ そんなに秋斗さんのこと好きなの？
！」

「…聞こえてますよ関野さん…」

「どんだけ声大きいんですか…」

「そうだ！ 私は兄貴が大好きだ！」

「恥ずかしいし…」

「なんで声大きいんですか…」

……………あれ、収まりましたね。

うーん。なんたる、やつぱり凜はブラコンなんでしょうか…。

確かに僕もそういう知識が付き始めたときは凜の…おっと危ない！
黒歴史黒歴史。

「ふう。僕も寝ますかねー」

自室に入ってぱつと着替え、布団を敷いて寝転ぶ。
うーん、やっぱりこの瞬間は最高ですね…。

「こんばんは秋斗さん」

「ひい！？」

「兄貴遅いぞ」

「苦しいから上には乗っからないでほしいんですけど…」

「む、私が重いと言いたいのか」

「全くその通りで」

「秋斗さんレディにむかってひどいです！」

「知らないですよ！」

現状を描写するとうつ伏せに寝転んだ僕の左に関野さん上に凜で
す！重い！

「だがな兄貴、重いは想いなんだぞ」

「想われすぎてて気が重いです！」

「うまくない」「うまくないですね」

「……………何用ですか」

「夜のお話」「夜のコイバナですよ秋斗さん」

「ご自由にどうぞ。お二人で」

「秋斗さんがいないと意味がないんですっ！」「そうそう、兄貴が
いないとな」

「分かりましたよ…」

「……………え？ 何？ 私からなのか？」

「もちろんだよメイドちゃん！」「そういえばさっきは凜ちゃんっ
てちゃんと呼んでいたような」

「ふむ…私の好きな人か…？ そうだな…私は……………」

「ふむふむ？ 言ってみな！」「スルーですか」

「いない」

「駄目！」「それは無しです！」

「兄貴まで！？」

「ふふふ、僕は本当はSなのですよ…。なぜか今はいじられキャラになってるけど」

「乗っかられてますけどね」「私の尻にしかれてるがな」

「メイドちゃんのお尻小ちゃくてかわいいよね！舐めましたい！」

「やめてくれ頼むから！」「やめましょうねそいつの！」「ちっ、駄目だったか」

第四話。くお泊まり会編（後書き）

コメしてくれたら嬉しいな…

俺の小説がコメされないほどしょうもないのか、それともコメをするのが面倒な人が多いのかwww

第五話。く作戦会議編

どうも、春生まれの白石秋斗です。

放課後、僕と関野さんは作戦会議のために廊下で集合しました。

「秋斗さんっ！　すごいです！　転校生はかなりの美人です！　…

まあ私にはかないませんがね」

「そうですね…。やはり転校生は美人と相場が決まってるのですね」

「スルーですか。そうですね」

「それじゃあ関野さんは何か依頼されたら僕に連絡してください」

「はいっ」

それにしても心配ですね。

そのクラスに、というか学年に僕がいるわけじゃないから。

そうすると、僕の名前が知れているのか分らないし、関野さんは仲人として有名とはどうも思えないし。

「となると…。年下好きが僕に相談を持ちかけてくるのを待つしかない…」

「何か言いましたー？」

「いえなにも」

ふむ。年下好きねえ…。

「あれ、白石君じゃないか」

「ひい！　秋斗さん助けてえ」

「おー、どーどー。お久しぶりです笹川さん」

関野さんを拉致した笹川さんが現れました！

「あはは…。やっぱり嫌われちゃった？」

「当たり前です！」

「おー、どーどー。暴れないでください」

「私は馬ですか！」

「どっちかというところゴリラあたりじゃ…。いててて！」

足の指があ！

「秋斗さん…一緒に寝たことバラしますよ？」

「なっ…。君は関野さんを抱いたと言うのかい白石く…いたたたた
！…二人して足を踏まないでほしいけど！」

「変態っ！」「変態っ！」

なんだか話がそれで良かったかもしれないです。

「いや、最近転校生が来たと聞いてね。仲人引き受けてくれよう
ニタニタとする笹川さん。こんなキャラでしたっけ？」

「秋斗さん、どうします？」「まあ…笹川さんは…まあ…うん」

「なんで！なんで即答してくれないの！」

「良いでしょう喜んで！」「秋斗さん正気ですかっ！」

……やっぱりやめようかな。

でもまあ、笹川さんの評判は皆には良いはず。

イケメンだし。

「やったあ！さあ、僕を案内したまえ」

絶対キャラが変わってますよこの人……。

「それでは私のクラスにれつつらごーごーです！」

あれ…関野さんのクラスだったんだ。

…と、歩き続けて関野さんのクラスへ。

関野さんが転校生を指差す。

「おお、かわいいかも」

「まあ私には叶いませんがね」

「おー！あれぞまさしく僕の理想！」

笹川さん…。

「さあて、教室に入りますよっ！」

関野さんがノリノリだあ！

第五話。く作戦会議編（後書き）

なんというか、すごく遅れました。
すいません。

これからも不定期更新です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4252j/>

告白は激闘だ2

2010年10月8日22時04分発行